

常盤塾 2011/6/25 非公式議事録

文責： 今田純

出席者： 常盤 片平 松山 丸山 浅井 安梅 松崎 大下 上原 木村 昌子 久保
古城 今田 大槻 川手 古川

1) 常盤先生の談話

日経新聞のコラム「大機小機」11.6.21 を読んでいて、やるせなくなった。先が見えない、国難、ハードルが高い、落ち込みなど、ネガな語ばかりが並んでいる。必要以上に暗い気持ちになる。平家物語を聞かされているみたいだ。この空気はよくない。

コンプライアンスなど、必要以上に萎縮的な用語が社会に頻出している気がする。これでは社会全体が内向きになりかねない。抑制的な、お互いに足引っ張りあいするような言葉はあまり出さないほうがよいのではないか。

高度成長期の記事は、おそらくこんなではなかったろうと思う。一度探してみたい。

大きな天災に見舞われたからといって、あらゆることを人のせいにする風潮は嘆かわしい。後ろ向きでどうする。なんでもすぐ限界と断じて挑戦しない。そのような雰囲気は打破されなければならない。限界は超えるためにある。挑戦こそが必要だ。できないことを並べ立てるより、できるにはどうしたらいいか、夢を語ろう

よく売れた書籍”Visionary Company”、経営者の多くが読んでいるはずなのに、行動がビジョナリーでない。読むだけではいけない、実践するかどうかだ。まず Vision を持たねば。

最近のビジネス人を見ていると、這いつくばって当たり馬券を探している地見屋みたいなイメージを持ってしまう。堂々と前を向いて歩こうではないか。Vision を掲げ、明るく前に。

マスコミも問題だ。暗いことばかり書きたてて暗い世相に拍車をかけている。何かと言うと「無理だ」と断じる、挑戦しない発言はむしろメディアかえら発せられている。

じたばたしなくてもいいではないか。「植物になって人間を眺めたら」を改めて読んでみたい。互いに支え合う生物相。植物は動かないことを生き方に選んだ動物じゃないだろうか。

戦略だの作戦だの、戦争用語で語るのはやめにしないか。元気に生きる、それを旗印に掲げよう。

2) 片平さん：アジアの元気印、シンガポール

Singapore の Economic Development Board が産業誘致に熱心。その元気さたるや、学ぶべきものが極めて多い。アジアならではの High-Context 社会をちゃんと捉え、いたずらにグローバルというよりアジアのハブを目指して行動している。

アジアの消費者視点に立ち、「ホスト」たる存在を目指している。学歴や年齢は関係ない。とにかく元気。サポーターの一人として学んで来たいと思う。

<昌子さん>

先端医療の領域では、すでに日本飛ばしが始まっている。厳しい規制や制限を嫌気し、先端の50%しか上陸してこない。韓国中国が中心になっている

3) 課題図書発表 by 昌子さん。「物とモノのインターフェースとしてのデザイン」

物とモノ、二つの位相をつなぐ存在としてのデザインに着目しているようだ。そこにインターフェースがあり、本来見えている存在の裏側が **Back Space** として「ある」ことの意味を表現しようとしているのか。コンテキスト、図と地などに意識が配されている。

しかし物と者をつなぐところまでは認めているが、結局「霊」までは至り得ないとの指摘も為されている。いかにして生活そのものを芸術にしていくかがデザインに与えられた課題とされているが、よくは分からない。

<安梅>

社会脳の研究が進んでいる。集団でビジョンを描くにはセキュアな環境が必要で、まわりの受容がとても大切とされている。しかし、ここに書かれているような芸術というものは、少し異なる。人によって受け止めが違って当然。脳そのものでも、感じる部位と解釈する部位とは異なる。

<上原>

片平先生が時折言及するブリコラージュ（レヴィ＝ストロース）に近いものがあるのではないか。デザインとは、言わばユーザーイノベーション。使い手が決める。

<古城>

一口にデザインと言っても、工学と科学は違う。工業デザインは話が別。汎用性が大切になる。

<今田>

どうやらアフォーダンス理論を背景にしていると思う。

4) 課題図書「モノ学の冒険」について、メンバー各位の意見表明

5) 次回以降の課題図書

常盤／勝川／圓山／松崎／松山／古川 から推薦あり。投票により6書を選出。